JUL 16 1923

本願寺別院後任總長
足利師正式決定

京都本山より發表さる
來月十七日秩父丸で來任の豫定

本派本願寺布哇別院後任總長は足利瑞義師に一昨十四日愈〻決定、本山より發表あつた旨當地に入電あつた、來任期は不明であるが八月末に本願寺議制會があるので八月中に來任あるべく多分八月十日横濱發、同十七日ホノルル着の秩父丸で來任あるものと豫想されてゐる、去る十二月今村總長逝去後後藤環爾師任命され今日に至つてゐるが右は假任命であつたので足利師の任命により正式總長決定し後任監督の決定を待望してゐた信徒は安心したわけである

決定まで 經緯

候補に擧げられた人數名

足利師が布哇開教總長にいよ〳〵決定する迄には幾多の經緯があつて日本の宗教新聞に布哇本願寺後任監督問題として屢々報ぜられてゐたほどであつた、候補に擧げられた人は數名あつたが足利師ともに前本願寺執行長、現大阪津村別院輪番本多惠隆師、前本願寺教學部長現東京築地本願寺輪番岡部宗城師更らに前布哇中女學校長、現成溪高等學校淺野孝之氏等の諸名士等も候補に擧げられてゐたが、其のうちで足利師と本多師が最も有力と目され日本の宗教新聞は本多師の内定を報じたりなどして果して何れが任命を見るか現在に至るまで不明であつたが先日の本願寺内局の決定と共に、いよ〳〵足利師に正式決定したものである、蓋し足利師の任命は京都本山が故今村總長の高き功績を認めて其の遺志を尊重し遺業を完成せしめたい意嚮から故總長と親族關係の同師を任命したものの如く推察されてゐる

義師は既報の如く廣島縣深安郡西中條村勝願寺住職にて前佛教大學長、執行長、眞宗學研究所長を歷任し現執行の職に在り、同師の嚴父は觀學足利義山和上で同師は本願寺として

示寂後で なければ得られぬ院號『願海院』

前に於て本山より贈らせしほどの佛教界の功勞者で其の長子たる瑞美師も父和上に劣らぬ高德の人で今年六十三歳、故今村監督夫人清子氏の伯父に當る人である、同師は明治三十九年（一九〇六年）二月本山特派使として布教使林嶺信師を隨行として來布したことあつたが當時は本山の教學參議部次長であつた、足利師は法主直諭を信徒に披露し一般人士のために佛教大講演會を開いて後にオアフ、マウイ、ハワイ、カワイ各島を順次に各二ケ月に亘りて巡回し同年四月米大陸へ渡つた、足利特派使の來布の頃より本願寺教團として縣政府の公認を得且つホノルル出張所を別院に昇格せしめんとの議あり同年五月に時の管長大谷光瑞師より『ホノルル布教場を別院とし布哇別院と定む』の通達あつた事等ありて足利師は布哇別院とは因緣深き人である（寫眞は來布當時の足利師）

今村清子夫人の歸布期

郷里に於ける故今村總長の本葬儀に參列のため歸朝中なりし今村清子夫人は後任監督の未決定の儘に歸布を延期してゐたが二十日ホノルル着の淺間丸に乘船したとの通知なく同船に乘つてゐるか否か疑問で多分七月二十五日發、八月三日ホノルル着の大洋丸であらうと豫想されてゐる、同夫人は慶大に在學中の令息得之君を同伴の筈

今村夫人の伯父君

別院昇格當時に來布した

布哇緣故の老僧

布哇本願寺新開教總長足利瑞

本飛行隊
市俄古着
四機編隊、六千百哩を翔破
航空界劃期的壯擧完成

したが第一着はバルボ指揮太利オーベテロを出發アムス搭乘のファツショ色に彩られた飛行機で同機には駐米伊利大使オーガスト・ロツソ

搭乘して

ゐた、ミシン湖に着水の後二十四機搭の勇士は砲艦ウイルメツテにて大博覽會場中のソルジース・フイルドに急行し十の大觀衆の熱狂的歡迎に答た

航程六千百哩

タン・オデツセーとも云べきこの壯擧を完成した伊利飛行隊は去る七月一日伊太利オーベテロを出發アムステルダムに到り英國海峽を横斷愛蘭ロンドベリーに向ひ同地よりアイスランド、レークジヤビクに飛行、それよりカートライト、セデツタ、モントリールを經て市俄古に到着、全航程六千一百哩で、アムステルダムに着水の際一機が顚覆し一名の死者を出した以外に故障なく大成功を博せるものである、この壯擧に加はつた飛行機は複モーター單葉飛行艇である（寫眞は伊太利の訪米飛行隊の機艇（上）と航程圖（下）左は指揮官バルボー將軍）

布哇ホームス委員常任書記ウーレー氏はモロカイ島ホームステツドの布哇人植民者の狀態を調査し歸府したがその談に依るとホーレフアのホームステツダーは今年鳳梨の收穫から約二十萬弗を受領するを得た由である、昨年の收穫は二十一萬弗を齎したさうで今年の收穫噸數は昨年よりも少し減少の見込みである、百五十一名のホームステツダーが鳳梨耕作契約をして居るがその中で百廿六名はリビー會社と契約し廿五名はシー・ビーシーと契約してゐる、耕作面積は三千七十四英町である、昨年の生產噸數は三萬三千噸であつたが今年は三萬一千噸乃至三萬二千噸の見込である

自動車事故から
二萬弗要償訴訟

當市マリス・ブレーア・ボガダス夫人はブランチ・ヘレンリンコルンを相手取り昨十五日巡廻法廷に二萬六千九百二十一弗の損害要償訴訟を提起した、理由は昨年七月アラモアナでリンコルンの自動車と衝突した際全身不隨になるやうな負傷を蒙つたから損害を拂へと言ふのだ、一方リンコルンも同事故に依る負傷を理由に最近ボガダス夫人に對し二萬五千弗要償訴訟を起した

新田豊太郎氏妻

昨夜ク病院で死去

當市エルム街の新田豊太郎氏夫人は昨日午後六時半クキン病院で死去した、葬儀は明月曜日午後三時自宅出棺ヌアヌ墓地に於て執行される

美術館便り

ホノルル美術館の今週のプログラム左の如し

今のところ、自岩の外に、これとたよるもののない自分だし、一龍は急に支度くすると、ちみに大島の對に着かへて、早速に家を出かけた。

『典子さん、おハナといつしよに、ちよつと、お留守してゝネ。あんた、勝手に外へ出ては、だめなことョ。』

さう言ひおいて、出かけて行つた一龍が、一時間もしないうちに、むつつりした顏で歸つて來た——白岩の邸の玄關で、書生に言はれたためだつた。

『だめです。お會ひにならんと、言ひつけられてるんだから。』

顏を見るとすぐに、さう言ふのだつた。ひどい玄關ばらひだつた。

『まあ、どなたにも、お會ひにならないんですの。そんなに、まだおわるくツて？』

『いや、僕が電話をかけたんが知れて、すごく怒られちや（もう、これきりじやないか？）

で、これからの自分を考へずにゐられない。家へ歸つてくると、一龍は、典子とおハナを、今夜にかぎつて町の風呂へやり、西川の邸へ電話をおそくにかけて見た。

（典子をつかつて、西川の方から、すこしでもせしめてやらう！）

前からのたくらみが、これへ向け那覇を解纜致しました、その夜伊平屋島沖を過ぐる時、牧志熟ら思ふやう事志と違ひ自分が生きてゐては國家を累することが多い須らく自殺するに如かずと遂に自ら海に投じて歿してしまひました、時に年四十五歳、嗚呼彼は一代の國士にして大いに將來を有する具眼の人物でしたが齊彬公に認められ破格の榮達をしたので同輩の羨望の的と

夜學校開
▲來る七月十七日
▲カイムキ學院内
教授課目
日本語課——讀
英文課——翻
▲申込は直接會館及電話
何人でも入學隨意
主催 カ

處六日間となり各團體、組合共全力を傾倒して猛練習中であるが中にもワイパフ組の新